

## ヒポクラテス

星 和 夫

新潟大学附属図書館

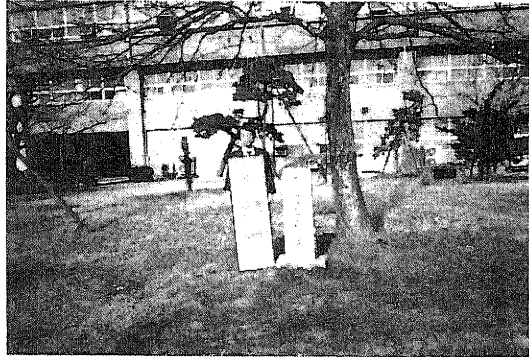
医聖ヒポクラテスのことは医学研究者なら誰でも知っているほど有名であるが「ヒポクラテスの木」についてはどうであろうか。

当大学医学部にその木がある。この木の由来は、ヒポクラテスが生まれたギリシアのコス島の町の中央広場にとても古くから繁っているスズカケノキがあり、この木の下でヒポクラテスが弟子たちを教えたという伝説があって、この木を「ヒポクラテスの木」と呼んだといわれている。

昭和44年コス島からヒポクラテスの木の種子を持ち帰ったのは当時新潟がんセンター蒲原宏博士であり、それが今医学部に育っているのである。

日本にはこのほかに山形市篠田秀男博士、東京都緒方富雄博士等がこの由緒ある血統づきの種子を持ち帰り日本で育てた。

なお、ヒポクラテスの木といってもこの木は明治以来日本に渡来しており、今では公園や家庭や街路にたくさん繁っているスズカケの木である。



当大学医学部の教授であった中田端穂博士は芸術家である。ギリシア、コス島博物館の大理石立像をもとにして画した「ヒポクラテスの像」や「学問の静かに雪の降るは好き」と書かれた色紙が当分館にある。もちろん医学部のヒポクラテスの木の傍らに建っている石碑の文字も博士の揮毫である。

## 医学図書館に来て体験した心の眩き

高井 真利子

新潟大学附属図書館旭町分館

まず最初にお断りしておきますが、ここに書いてあることは私の個人的な感想であり深い意味はなく、軽い気持ちでお読みいただきたい。

私の普段の仕事は図書の目録整理であるが、総

合図書館では体験しなかった心の中の眩き（天使と悪魔の如く対照的な声）をときどき聞くことがある。沢山の本の山を前に、図書の目録作成のため本を手を持ちざっと目を通してしていると、そのと

き声が聞こえて来る。

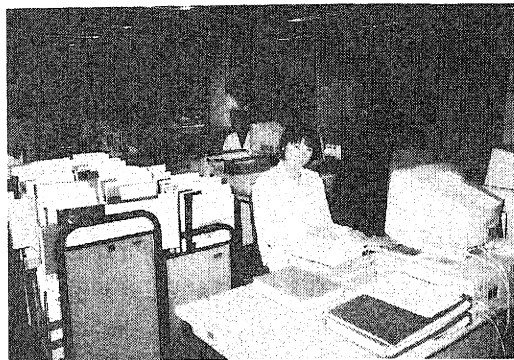
「目の疲れや肩凝りにめげず入力しているこの1,000ページ以上もある英文の本の一体何ページが読まれるのかしら。ひょっとすると一度も開かれることがないかもしれない。これを読むにはかなり時間と忍耐力が必要だから。」

とまず悪魔の声が聞こえる。

しかし次にはちゃんと天使の声がフォローする。

「この本によって病気や怪我が治り、あるいは命が助かる人がいるかもしれない。また、将来この本が私の命を助けてくれるかもしれない。だとすると今私はとても大切な本の目録を作っているのだ。」

するとなんとなく気合が入り、キーを叩く手も軽



やかになる。

というようにいつもこの繰り返しである。このような呟きを聞くのも医学図書館にいるからこそである。

## ある日の出来事

脇坂 勝人

富山医科薬科大学附属図書館

私が平成6年4月に本学附属図書館情報サービス係に転任してから、今度で2回目の冬を迎えます。まだまだ半人前の仕事しかできなくて、先輩方の足を引っぱっている毎日ですが、このたび本誌への原稿依頼を機に、普段のカウンターの様子を紹介してみたいと思います。

\* \* \*

某月某日午前9時、開館。さっそくいつもの常連たちが入ってきて、閲覧室に消えていく。多分、自習用の指定席を決めているのだろう。こういう古典的な利用法に対して、最近は学内LANを経由して、館外からでも求める情報を引き出せるようになった。今後は、こうした利用形態が主流になっていくのだろうか。そうすると、姿を見せな

い利用者に対するサービスはどうあるべきか、今日は朝から考えさせられる。

午前10時、学生A君が本を借りにきた。

A君「この本を貸してください。」

私「アレ？ あなた、まだ返してない本がありますね。随分遅れていますよ。」

A君「あっ、すみません。すぐ返します。」

というわけで、貸出不可。

延滞本は、図書館の慢性的な問題だ。その解決には利用者のモラルの向上が不可欠であるが、あまり効果がないのもまた事実。もっと強烈な対策が必要だが、罰金制を導入するとか、延滞期間は一切の図書館サービスを受けられないというのはちょっと過激すぎるかしら。いずれにしても、A